

文豪先生

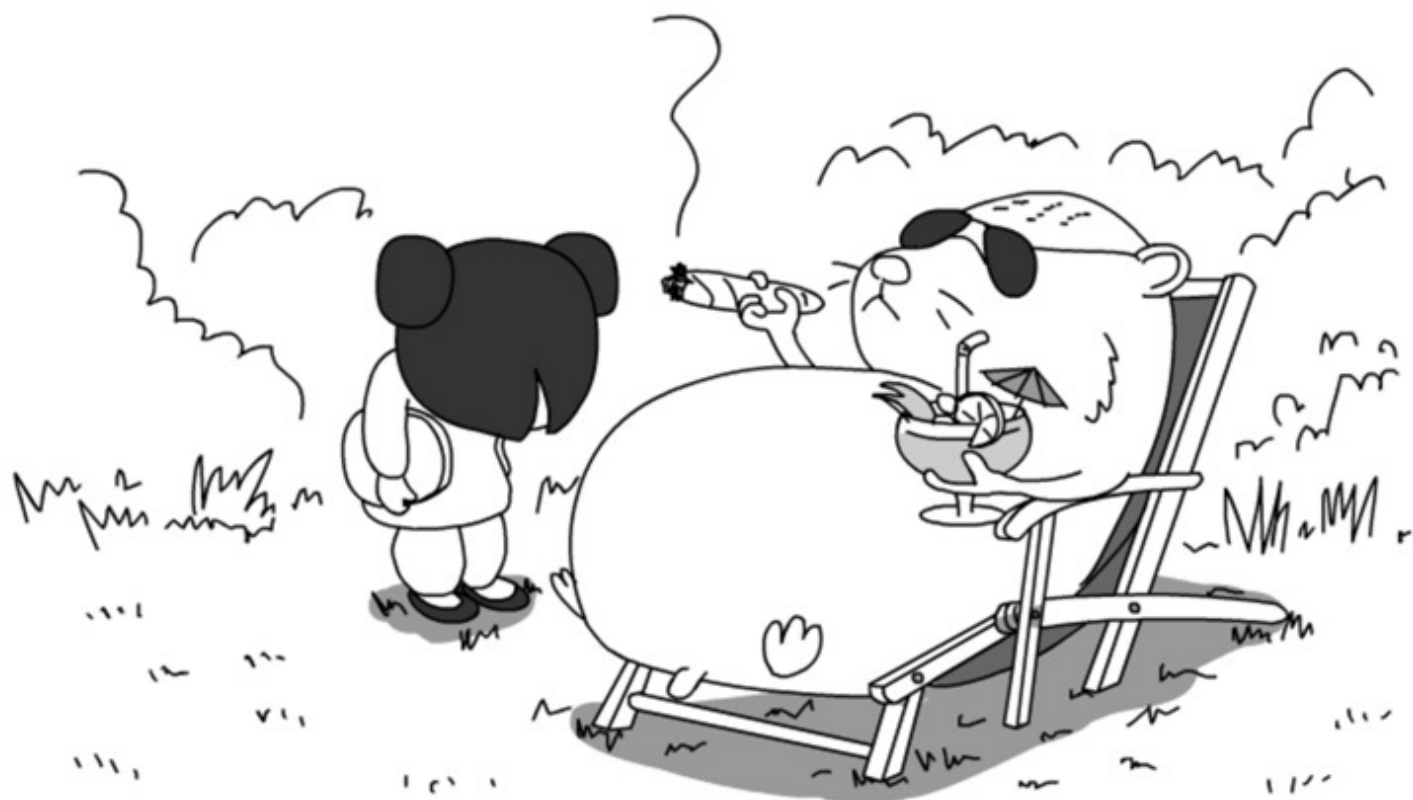
bungousensei

第十話

中川善史

絵・かないてつお





「ちゅう、ち・・・」と、ハムーが言いました。
「明日のフライトでニースに飛ぶ」という意味です。

「ははっ」と、ハムーにトロピカルドリンクを運んできたろろんが畏まって答えま

す。
ハムーはサングラスをしてデツキチェアに寝そべっています。

「ちちち、ちゅ（飛行場までのへりも手配しておくように）」

「わかったぞ、でござりまするのだ」

ハムーはトロピカルドリンクを一口飲んで、

「ちちー、ちゅちゅ！（温州みかんが入っていないじゃないか！）」

と怒鳴り、グラスを地面に叩きつけました。

「ひえー、申し訳ないぞ、でござりまするのだ」

ろろんは、ぺこぺこしながらグラスの破片を片付けています。

「ちゅちゅちゅう・・・（まったく、何度言っ

たらわかるのだ・・・」

「あんなに居丈高になるやつだとは思わなかったな・・・」
ハムーとろんろんを見ながら文豪先生がつぶやきます。

「ハムーは今日の功労者ですけどね・・・」
と、となり立っていたのは白井村長です。

「ろんろんの敬語めちやくちやだし・・・もつとも、私には敬語を使った事なんてないけれどな」

ここは、地蔵の立っている旧往還です。地蔵の周りでは、幸太、砂府、民子、川村助役により地蔵堂の組み立て作業が行われています。

木材は分教場で加工されたのを、ここで組み上げられています。石の土台もどこから古いものが調達されていました。それらをリヤカーに積み、ここまで運んでこれたのは、巨大化したハムーの力仕事のおかげだったのです。

リヤカーから材料を降ろし、石材を地蔵の周りに設置し終わると、砂府青年が「サンキュー、ハムー。お前はもういいよ」

するとハムーが「ち、ちゅちゅちゅちゅ？」

「それだけか、とハムーが言っているぞ」と、ろんろんが通訳します。

「それだけか、って、なに？」

「ちゅーちゅちゅ、ち（報酬はスイスの銀行口座に振り込む約束だぞ）」

「報酬って・・・お前、単なるネズミじゃん」

それを聞いたハムー、突然、

「がおー（ネズミとはなんだ!）」

と暴れ出し、せっかく持ってきた材料がたたき壊されそうになります。

「最近、ハムーはハムスターとしての誇りに目覚めてきて、ただのネズミとか言われると怒るのだ」

「砂府君、謝って」

と村長。砂府青年は、仕方なさそうに頭を下げて、

「僕が悪かった。すまなかつた」

「ちゅちーち、ちゅちゅ（そう思うなら、ついでに俺の業績を顕彰する記念館をこの地に建てて欲しいな）」

「記念館だそうです、村長」

「記念館ねえ・・・文化財保護研究所の予算を削って回すしかないわね」

「ひいー」と民子が青ざめます。

「そ、村長、ただでさえ低予算でやっているのに、こんなネズミのために・・・」

「がおー（ネズミとはなんだ!）」

というわけで、ハムーの破壊活動を防止するために、ろんろんが

「なぜだ・・・」

接待係として任命されたわけです。

「わたし、ろんろんは飼い主のはずだぞ・・・」

「ちゅー!（お茶がぬるい!）」

「も、申し分けないであるぞ、でござりまするだ」

「ちゅーちち（まったく使えないやつだ）」

「す、すんまそん」

「ち、ちゅー（メシにする。特盛りでな!）」

「と、特盛り・・・」

這いつくばっていたろろんが立ち上がり、その表情が変わりました。

「おまえ、その身体で、特盛りなんていったら食費がいくら掛かると思っているのだ!」

「ち、ち!（ケチなこと言うんじゃねえ!）」

「もう、がまんできん、小さくなれ!」

と叫びました。ハムーは元のハムスターの大きさになって、ろろんの手のひらの上に乗ってしまいました。

「なんだ。始めからこうすればよかったのだ」

「ちー」

「もう好きにはさせんぞ!」

「ち、ちー（お、おゆるしくだせえ、お代官様）」

「ゆるせとな? ふふふ、片腹痛いわ。お前の命はわしの手のひらの中じゃ」

「ちちち（しえー、お慈悲をー）」

「安心しろ、すぐに殺しはせぬわ。百姓どもは生かさず殺さず搾り取る・・・」

それを見て文豪先生、



「なんだか、力関係が露骨に現れる会話だなあ」

「ろろんは、敬語よりお代官様言葉の方がなめらかですね」と村長。
(なぜ、文豪先生と村長がハムーの言葉がわかったのかという疑問をお持ちの方もおられましようが、ま、小さな事はどうでもいいでしょう)

というわけで、地蔵堂が出来上がりました。地蔵堂というには、あまりにささやかなものですが、それでも、屋根ができ、自分を困うものができた時、地蔵は、今までにない、ほっこりとした感じをおぼえました。江戸時代から、今まで、ずっと風雨にさらされてきたのです。

「自分の家に帰るって、こんな感じだったんだらうか・・・」
と、地蔵はしみじみとつぶやきます。

「今までで、一番平和な気持ちになったような気がする」

「よかったですね。幸太君のおかげですよ」と民子。

「ち、ちがうよ」

と、幸太、照れて真っ赤になります。

「砂府先生がいなかったら、できなかつたよ。自分たちで作ろうと言い始めたのも砂府先生だし、村の人達に材料をもらって回ったのも砂府先生だし・・・。お地蔵さん、ありがとうを言うなら、まず、砂府先生に言ってよ」

「そ、そうなのか？」と地蔵。

「いや、そんなことないですよ」と砂府青年。

「ほら、そんなことないって言ってるぞ」

「あれは謙遜です」と民子。

「そうか・・・俺は誤解していたのかな。砂府といえば、悪逆非道の女ったらしだと思っていたが」

「そんなこと思っていたんですか」

「案外、いい奴なのかもしれないな・・・案外・・・意外にも・・・考えても見なかったことだが・・・あり得ないことではあるのだが・・・信じられないことではあるのだが・・・」

「そんなにも意外ですか」

「よし、それじゃ砂府を表彰しよう」

「いいですよ、お地蔵さん」

「いや、表彰する。副賞は豪華海外旅行だ」

「いきなり大きく出ましたね。どこへ行けるんですか」

「ゴビ砂漠の真ん中への片道切符だ。おめでとう」

「なんだか、捨てられに行くような気がするんですが」

「では、表彰式にうつる。白井村長！」

「え、わたし？」

村長、きよとんとしています。いつの間にか、地蔵が仕切っています。

「そう。村長、砂府君に賞状と副賞の目録を渡しなさい」

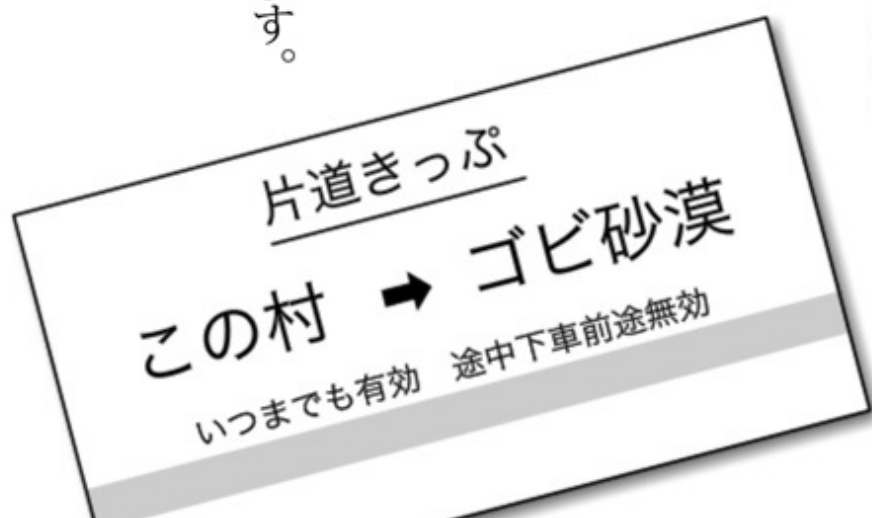
「え？ 用意していないんですけれど」

「なにをやっているんだ！ あれほど言ったじゃないか！」

「あとう、表彰って今思いついたんじゃないですか？」

「しょうがないな、じゃあ、あとで用意しておくように」

「ゴビ砂漠への片道切符をですか？」



「続いて白井村長！」

「また、わたしですか」

「祝辞を読みなさい」

「え？ 今？」

「そう、村長つてのは祝辞を読むためにいるんだろ？」

「そうとばかりは、言えませんが。困りましたね・・・では、こういうのは、どうでしょう。次の日曜日に、地蔵堂の完成を祝うパーティをここでやりませんか。みんなで、食べ物や飲み物を持ち寄って。他の村人にも呼びかけてみましょう」

村長の言葉に、地蔵は思わず言葉を詰まらせ、目が潤んできました。

「ほ、ほんと？・・・俺のためにパーティやってくれるの？ いいの？ 期待しちゃうよ？」

地蔵、頬を赤らめていましたが、急にうつむいてぽつりと、

「また、天保三年の時みたいなのに、寸前で川向こうにバイパスができておじやんになるとかないだろうな・・・」

「地蔵の古傷が痛み出したな」と文豪先生。

しかし、地蔵はたちまち元気を取り戻して、

「よし、わかった。じゃあ、パーティの実行委員に民子くんを任命する！ タミー、俺のためなら、やってくれるね？」

民子はこくりとうなずきました。

「うー、かわいい、そのいそいそとした感じ、新婚家庭の新妻みたい！」
こくり。

「あの、民子ちゃん、ここはうなずかなくていいのよ」

こくり。

「もしや、このうなずき方は。いやな予感・・・あー！ また、寝てるー！」

民子の身体がゆらりと傾いて、倒れそうになります。そこをとなりになっていた砂府青年が、抱きとめて、

「あぶない！」

と、危うく支えました。

砂府の腕の中に眠る民子。この様子を見ていた地蔵の目に嫉妬のほむらが、燃え上がらないわけがありません。

「砂府・・・きさま・・・」

砂府にしてみれば、いい迷惑のほむらなのでした。



その晩、地蔵は眠りというものを初めて経験しました。江戸時代からこちら、昼も夜も晴れの日も嵐の日も、地蔵は眠ったことがなかったのです。

それが、この板きれで囲われた自分の家の中にと、温かいものに包まれたような気がして、心地よい無意識の状態を味わうことができたのです。

そして、その眠りの中で、地蔵はカリブ海にいました。カリブ海のある島の浜辺に座って海を見ていました。浜辺のどこかに、新婚旅行に来た民子がいるはずだな、と人々の姿を追っていました。

「俺は眠りの中で、世界の、いや、宇宙のどこまででも行ける……」

カリプソの音楽が響いてきます。軽やかなスチールドラムの音色が聞こえます。

「あの音楽は誰が演奏しているんだろう。まるで、自分の中から響いてくるようだ。自分の頭が共鳴しているようだ……自分の頭が……」

地蔵は目を覚ましました。スチールドラムの音はまだ鳴り響いていました。まるで、自分の頭が鳴っているように……。

自分の頭が鳴っていたのです。

目の前に、からくり師で幸太の父の十一代目・杉本源太夫が座って、地蔵の頭を小さなハンマーで叩いていたのです。それがスチールドラムの音に聞こえていたのです。

「それ、きんきんき、こきんき、きつき、つと。いい音だねえ」

「おい」

「うーん、どっから見ても石だねえ。それも硬度の高い石だよ。それ、きんきんきんきん、こんちきち、つと」

「お前、なにをしている」

「お、しゃべった、しゃべった、これが不思議なんだよな、きんきんききら、きんきん、きん」

まだ、叩くのをやめません。

「どういう、からくりなんだろうねえ。きんきんきん」

「叩くのやめーい！何しに来た！質問に答えなさい！」

源太夫は、質問に答えるどころか、地藏の頭の音色を伴奏に歌い始めました。

♪からくり かりぷそ からんからん
からくり かりぷそ からんからん
からくりとカリプソはよく似てる
でも、よく考えたら、かの字が同じだけ

からくり かりぷそ からんからん
からくり かりぷそ からんからん
からくりとカリプソ かの字が同じ
でも よく考えたら かたっぽひらがなで
かたっぽかたかな



「おめえ、真夜中になんでひとりで盛り上がって歌ってるんだ」

と、地藏が睨みつけますが、源太夫の方はどこ吹く風、

「どうでえ、いい歌だろう。でも、二番の最後のところはすぐ早口で歌わなくちゃだめなんだけどな。さて、この歌を作ったのは誰でしょう」

「知るか！」

「はい、正解は俺でした！ きんこんかんこんきんこんかんこん」

と、源太夫、地藏の頭を乱打します。

「こいつ、俺以上に人の話を聞かないタイプだな」と地藏。

「しかし、不思議だな、不思議だな、どうして石がしゃべるんだろう」

「いいんだよ、しゃべるからしゃべるんだよ」

「他の人は、不思議だとか、調べたいとか、解剖したいとか言わねえ？」

「別に、普通に受け入れているよ」

源太夫、さつと真面目な顔になって

「実を言うと、これを平然と受け入れている人々の態度がこの『文豪先生』で一番不思議なところなのかも知れないな……」

「なにを素に戻っているんだよ」

「だいたい、第一回で文豪先生があんたと会話を始めたりするからいけない」

「おい、お前、登場人物にあるまじき発言をするんじゃない」

「ま、そういう話は脇に置いてだ……ここで問題です。さて、私はなにをしに来たんでしょう」

「それは、さつきから俺が質問してることだつちゅーの！」

「はい、正解は、うちのきゃわいいきゃわいい息子、杉本幸太ちゃんのことでした。」

きんこんかんこんきんこんかんこん」

「頭叩くのやめろ！」

「地蔵よお、お前、うちのきやわいいきやわいい幸太ちゃんに、なにか無理難題ふっかけているだろ」

「そ、そんなことないよ」

「嘘つきやがれ。ここのところ、幸太ちゃんたら、地蔵堂の製作で張り切っているかと思えば、妙にふさぎ込んだりしてよ。変なんだよ。それを、この賢い父親が見逃すはずはあるめえ？」

「それと俺とどういう関係が……」

「ま、うちのきやわいいきやわいい幸太ちゃんは性格が素直だから、まあ、寝言だの、ひとりごとだの、お地蔵様だとか、ロケットがどうのとか、ぶつぶつ言つてやがんのよ。こりゃ、きやわいいきやわいい幸太ちゃん、なにか悩んでいるな。目の中に入れても痛くない一人息子だ。なんとかしなきゃならねえと思って、目の中に入れてみたのよ」

「なにを？」

「ある晩、寝ているところをよ、目の中に入れてたり鼻の穴から出したりしてみたんだよ」

「お前、化け物か」

「ま、そうしているうちに、だいたい読めてきたな。地蔵、おめえ、うちのきやわいいきやわいい幸太ちゃんに、無理なからくりを作らせようとしているだろう」

「い、いや、そんな……ま、幸太君の素質を見込んでだな……」

「いや、無理無理。いくらうちの幸太ちゃんが、お利口で性格もよくてきやわい

くてきやわいくてたまんないからと言って、まだ、からくりを仕込んでいるわけじゃねえ。まあ、せいぜい、この地蔵堂くらいだな、今のところは」

「それで・・・？」

「だからよ、幸太ちゃんに代わって、俺がお前さんの望みをかなえてやろうじゃねえかってえの」

「え？」

「いや、幸太ちゃんじゃ無理だが、俺に任せれば、ちよちよいのちよいだから」

「そ、そうか・・・」

地蔵の脳裏に（地蔵に脳があればのはなしですが）昼間の砂府が民子を抱きとめた図が浮かんできました。

「実行すべきかもしれないな。『スナフキンがタミーにちかづいたらあきまへんでスペシヤル』・・・そう、日曜の例のパーティの席で・・・」

「おう、それよそれよ、『ナフキンが、たも網に蹴つまずいたスペシヤル』だって？ いい名前だなあ」

「ちがーう！ スナフキンがタミーに・・・」

「ごちやごちや、うるせえな！」

と源太夫は地蔵の頭をハンマーで強打しました。地蔵は気絶してしまいました。（地蔵が気絶するのも江戸時代以来初めてです）

「ま、おめえが眠っているあいだに、ちよこつとやってやろうじゃねえか・・・その代わり、その『たも網スペシヤル』成功の暁には、お前を解剖させてもらうからな・・・」

はたして、「たも網スペシャル」(なんだ、それ)は成功するのか？ 地蔵の砂府に対する誤解というか、思いこみはいつになったら解けるのか？ それとも、別にそんなことどうでもいいや、ということになっちゃっていいのか？
次回を待て！

(つづく)



文豪先生 第十話

<http://p.booklog.jp/book/74652>

著者：中川善史

絵：金井哲夫

発行：文豪堂書店

文豪堂書店の楽しいブログ：<http://bungoudou.blog.fc2.com/>

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kanaitetsuo/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/74652>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/74652>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ